正宗白鳥

岩野泡鳴論

岩野泡鳴論

一

かつて、近松秋江君に小石川の往来で行き会った時、彼れは、先夜竜土会(りゅうどかい)に出席したといって、その会の様子を興もなげに語ったが、その話のうちに、

「岩野は詰まらん坊だ」といった。悪意を籠めていったのでもなく、その批判を高調しようとしたのでもなく、笑うでもなく嘲(あざけ)るでもなく、「つまらんぼうだ」と事

もなげにいった。その批評語に私も同感したので、十数年後の今日なお記憶によく残っている。

「君はデカダンだよ」と、竜土会の席で誰れかがいうと、

「僕がデカダン？　悦しいねえ。ハッハッハ」と、泡鳴が声高く笑う。……そういった様子を思い浮べると、私にも、岩野が詰まらん坊に思えたのであった。

私は泡鳴とは一時よく往来していた。彼れは、原稿の捌(は)け口を志して、ある日突然私を読売新聞社に訪ねて来たのであった。その頃石川啄木も突然訪ねて来た。私は、

青白い顔をした虚弱らしい小柄な啄木と、五分刈頭のノッポの、元気のいい、しかし粗野な泡鳴とを、心の中で比べて、詩人にもいろいろあるのだなと思っただけで、こういう人達に寄稿を頼む気はなかった。その頃の私は、当時の詩人をあまり好んでいなかった。ところが、その後、小山内君主宰のイブセン研究会に出るようになってから、泡鳴とも懇意になった。森川町の私の下宿へもおりおりやって来た。私の方からも彼れの家へ訪ねて行ったが、最初行った時には、彼れは、赤坂台町に住んでいた。家は汚かったが、彼れの二階の書斎に洋書がドッサ

リ置かれているのを見て意外に思った。彼れは私を誘って溜池の東京亭へ連れて行った。食事をしたあとで、彼れは階下へ下りて玉を突いた。その時私ははじめてキューを手にしたのであった。

私は、彼れが巣鴨に移転した後は彼れの家へ足を向けなくなったが、それまでは頻繁に往来した。最も親しくしていた一人であった。一しょに球戯場へ出掛けたり、囲碁に耽ったこともあった。絶えず熱烈な議論を聞かされたり、身の上話を聞かされたりした。しかし、私は、世間でいっているように、泡鳴の話をそう面白いとは思

っていなかった。秋江君のいわゆる「詰まらん坊」という感じがすることがあった。訳の分らん気焔（きえん）を吐いて、面白くもないことを独りで面白がって高笑いをしているのが、滑稽に感ぜられることがあった。……でも、気の置けない、表裏のない親切気のある人間のように、その頃の私には思われていた。小説などに表れている彼れは、気の荒い無法者のようであるが、あれで、案外、人の気を兼ねる男で、世俗の風習に捉われている常識家であった。そうでなければ、私があんなに長く交際を続け得られるはずがなかった。彼自身の顔があんなに文壇に売れ

るはずがなかった。

二

『耽溺（たんでき）』という長篇は、小説家としての彼れの出世作で、いろいろな点で、彼れの小説の見本といってもいい。『坊つちやん』が、漱石全集において占めている地位に似ている。しかし、文壇の一部の人々に認められただけで、世間一般の読者に受け入れられたのではなかった。『耽溺』も『坊つちやん』も、作家が一生の半ばを過ぎ

て、浮世の経験も豊富になっている四十歳近い頃の作品であるが、この二つの作品の面目は著るしく異っている。当時漱石は官立大学の教師であり、泡鳴は、月給二十五円くらいの大倉商業学校の教師であったことが、作品に対する世俗の信用を異にした所以で、さながら、書画骨董の売り立てにおいて大大名の所蔵であるか、一平民の所蔵であるかが、買い手の心持に影響するのと同様であるが、作風も、泡鳴のは、漱石のように通俗向きではなかった。卑近な正義観を含んでいなかった。……それに、漱石は、はじめから才気煥発と評価していいような目醒

ましい筆使いを見せたが、泡鳴の『耽溺』はまだ稚拙であった。

この小説はいわゆる「自然主義」時代に現れたので、その頃には「耽溺」という言葉が流行していた。その以前には、樗牛の唱えた「美的生活」あるいは、「ニーチェ主義」という言葉が、卑俗に曲解されて流行していたが、それらの系統を追うて露骨になったのが、「耽溺」という用語であった。小栗風葉にも、『耽溺』という小説があった。そして、題目を同じゅうする二小説が比較されて、風葉のは、無反省な耽溺で、泡鳴のは、現代的

苦悶のある耽溺であるなどと批評された。

ところが、今読み直して見ると、泡鳴の『耽溺』なんかは、大した耽溺でも、現代的苦悶のあるそれでもないのである。花袋氏の『蒲団』を、今の目で見ると、有り振れた甘いものと思われるのと同様である。自然主義の幹部として非難の矢を浴びていた二氏の如きも、あの頃はまだ初心であった。彼らによって創(はじ)められて、小説作法の常態となった自己の現実暴露は爾来二十年を経て、次第にすれっからしになった。彼らの後継者は藍(あい)より出でて藍より青くなった。

要するに、『耽溺』の一篇には、当人の意気込んでいるほどの苦悶が含まれているのではないが、彼れは、此処から進んで行った。自己の熱烈な努力とともに、境遇が彼れを追い立てて歩を進ませた。

『耽溺』は、国府津（こうづ）の海岸のお寺を借りて避暑していた学校の先生が、ふとしたことから、隣家の芸者に馴染んで、それを東京へ連れ出して女優にしようと企てることが、主要な筋立てであって、その芸者の土地の贔屓（ひいき）客と、先生たる主人公との間の嫉妬悶着と、先生の貧乏とが、一篇の筋立てに味をつけている。……ところで、作

者の経験記録であるこの小説は、場所を、国府津の海岸で起ったことと指定してあるが、その材料となった実際の事件は、野州（やしゅう）日光の町で起ったことなのだ。他の作家ならそれでもいいが、泡鳴としては、その主張に照らして不徹底であった訳で、後年の彼れは、そんな小細工はしなかった。時々思い出したように、「ふと浪の音が聞えて来た」だの「暫く怠っていた海水浴でもして」だのと、海岸生活らしい文句を挿んでいるが、それは取ってつけたようなもので、全体は山の生活らしいのである。

先生と芸者との関係なんか、いかにもバサバサしてい

て、しめやかな情趣といったようなものは、ちっともない。これは、後年まで彼れの作品を一貫した特色である。彼れの作中の男女は、恋を語っても決して蜜のようではない。「へん、そんなことを知らないような馬鹿じゃねい。役者になりたいからよろしく頼むなんぞと白ばっくれて、一方じゃ、どん百姓か、肥取りかも知れねいヘッぽこ且つくと乳くり合っていやあがる」といったようなのが、先生のいつもの口吻（こうふん）である。そして吉弥（きちや）という芸者も「おからす芸者」という綽名（あだな）の通り色が黒くって、何だか汚らしい。恋愛小説中の女性は、概して美しく描

かれるのを例として、近年の実験記録の小説でも、作者の主観によって色取られて、そこに描かれる女性は、読者を魅するところがあるのだが、泡鳴のにはそれがない。醜男醜女の情事を見ているようで、読者は読みながら羨望の感じを起すことがない。しかし、小説を娯楽品とせずして、人生世相の真実の記録とする立場から見ると、泡鳴の態度に真実性が多いのではあるまいか。

四十歳近い『耽溺』の先生は、自分より年上の、世帯窶(やつ)れのした、ヒステリーの古女房に倦怠を感じている。その頃、多くの作家の題材とした「中年の恋」を、彼れも

求めていたので、ふとした機会で接近した田舎の「おからす芸者」によってでも、心の不足を満たそうとした。しかし、平凡人の浮気とは違って、彼れは、自己の抱懐せる人生観を応用して、この単純な「見ず転買い」以上の何物でもないものに、深刻らしい意味をつけようとした。「堕落、荒廃、倦怠、疲労――僕は、デカダンという分野に放浪するのを、むしろ僕の誇りとしようという気が起った」などといい、あるいは、彼れが読みかけているメレシコフスキーの『先駆者』の主人公、レオナルド・ダ・ヴィンチの高尚典雅純潔な生涯を、自分の生涯

に比して、「僕の神経は、レオナルドの神経より五倍も十倍も過敏になっている」といっているところなんか、読者に「詰まらん坊」の感じを与える。丹念に書かれているが、作者の苦悶が紙上に現れていない。直ぐにこの女を女優にしようと企てるのも滑稽だが、この作者は自分の接近した女は、誰れをでも女優にしようと、大真面目で考えていたのだから妙だ。

『耽溺』一篇の苦悶は、些少の金がありさえすれば、直ぐに解決することであったが、作者は全心の努力を試みているに関らず、運命的に窮乏に苦しめられていた。

しかし、その窮乏と愛慾とのもつれも、この小説ではまだ初歩であった。作者の闘志もまだ充分に錬え上げられていなかったので、「妻が痩せたのを聯想（れんそう）するせいか、父も痩せていたようだし、今相対する母（継母）もまた頬が落ちている。僕は家族にパンを与えないで、自分ばかりが遊んでいたように思えた」と、多少の自責の弱音を洩らしたり、免職を気にしたり、国府津の負債の仕末をつけるために、妻君の衣類を質入れすることを、「残忍なほど明確な決心」といい、「僕がわざわざ（年上の妻に）若作りさせるために買ってやったのだ。今では不

用物だから、子供の大きくなるまでといってしまい込んであるが、その色は今も変らないで、燃えるような緋縮緬には妻のもとの若肌のにおいがするようなので、僕はこっそりそれを嗅いで見た」と、花袋の『蒲団』みたいな気持を現し、また、「今の妻と吉弥とはどちらがいい？」と、われとわが心にたずねて、

「無論吉弥だと、いい切りたいのだが、心の奥に誰れか耳をそば立てているものがあるような気がして、そう思うことさえ憚られた」というなんかは、当時の泡鳴がまだ初心だったためであった。そういうところに、いわ

ゆる人間味なるものがあって、批評家に喜ばれるのであろうが、しかし、そんな凡庸な人間味に捉われているようでは、泡鳴に特異性がない訳だ。すべての感傷主義を打破して自我に徹するところに、彼れの強さがあるのではないか。

彼れを裏切った吉弥（おからす芸者）が、悪性の眼病に罹っているのを見届けて、「いい気味だ」と喜んで凱歌を上げるのが、結末になっているが、そういうところは泡鳴の稚気ある特色である。

三

明治四十二年の末であったと記憶している。私は目白坂のほとりに住んでいた。紅葉の頃京都に遊んで、有馬や大阪を経て故郷へ帰って、帰京後は新年号の小説に筆を執っていた。泡鳴が樺太の事業に失敗して、北海道をうろついて、ようやく帰って来たといって、私を訪ねて来たのはその頃であった。不思議にも洋服（馬乗洋服だそうだ）を着用していたが、外套は着ていなかった。頑健な彼れの顔も窶（やつ）れていて、尾羽（おは）打ち枯らした浮浪人の

ような印象が与えられた。五部作の最後の『憑き物』に描かれているような極度の窮乏と淋しさを経験していた時なのだが、そういう事情は、私にはよく分っていなかった。例の通り愚痴や泣き言は、彼れの口から出なかったから、私は彼れの失敗談も面白ずくで聞いていた。彼れは、差し当って原稿の捌け口を見つけることと、女を手に入れることとを志しているといって、「一人は蕎麦屋の女で、一人は教育のある女だが、どちらにしようかと迷っている」と、真顔でいった。こういうことをアケスケというのは、世の笑い草になるのであるが、しかし、

私は、今度彼れの五部作の終篇を読んだ後で、こういう彼れの話を思い出すと、哂(わら)う気になれなかった。仮面を脱した人間の真実の声のように思われた。あの場合、どんな女でも側に置かなければ、生存に堪えられなかったのであろう。そして、間もなく撰ばれたのは、「教育のある女」たる清子女史であった。泡鳴は女史によって救われたのであった。彼れは全身を捧げて女の愛を求めたに違いない。彼女が増長したのは自然の勢いであった。

私は、泡鳴全集に収められている日記集を、今度はじめて読んだ。彼れがある新聞の記者になって大阪へ行っ

て、池田に住んでいた時分の、明治四十四年四月から、大正九年四月まで、日記が続いている。殆んど止切れていない。ここにも彼れの熱心と忠実とが見られる。

私が彼れと頻繁に往来していたのは、この日記以前のことで、その後は疎遠になった。『巣鴨日記』の大正二年八月二十一日のところに、「晴、山田（孝）氏、田代氏と共に来訪。正宗（白）氏来訪……」と記されているが、その時が私の方からの訪問の最終であった。彼れの死んだ時にも、私は東京にいなかったので、葬式にも出掛けなかった。彼れの最後の同棲者とは面識もなかった

ので、弔辞をも送らなかった。

泡鳴の逝去を知ったのは、旅行中に手にした田舎新聞の記事によったのであったが、彼れが病気に罹っていたことを全く知らなかった私は、寝耳に水の感じがした。「あんな強い奴が、そんなに脆(もろ)く死んだのか」と、型の如き無常観を呼び起した。

かつて、ある知人の死について、泡鳴に話した時に、彼れは、「死ぬ奴は馬鹿だ」といったことがあったが、私はそれを思い出した。古代神道にも現れている生々主義は、彼れの信仰であって、彼れは、無内容空虚を意味

する「死」を蔑視していた。「僕に心熱が無くなったら死も同様だから舌を噛んででも死ぬる」といっていたこともあった。死後の生命など説く宗教を愚劣極まるものとしていた。私は決して同感はしなかったが、それらについての、彼れの確信が、口先ばかりではないのを壮としていた。そして、死者生前の意志を重んじる慣例に従うならば、泡鳴の追悼会なんか催すのは無意味であると思っていた。

「見ぬもの清し」という諺がある。また「聞いて極楽、見て地獄」という諺が、いろは加留多（ガルタ）にも出ている。私

は、東京における泡鳴の住居はおりおり覗いていたし、その生活振りをも知っていたのだが、大阪における彼れの生活は一瞥もしていなかった。それ故『池田日記』にしるされている彼れの生活だけは、不断の泡鳴らしくない床しさをもって私の目に映じるのである。箕面（みのお）道にある閑静な住宅で、蜜蜂なんかを飼って、例の「教育ある女」と、文学的生活を営んでいる有様が想像される。しかし、それは、私が、直接に彼れの池田における現実の生活振りを見ないで、ただ日記を通して想像しているためなのであろう。離れて想像していると、我々文学者の

生活は、多くは面白可笑(おか)しく過されているように思われるのであろうが、「聞いて極楽、見て地獄」である。

日記を通覧すると、彼れは、一々の原稿の題目と、それの捌け場所と、受け取った原稿料の高とを、完全に書き留めている。一円二円の零細なものだって洩らしていない。極度の生活難に襲われていた一葉の日記にだって、うまい物を食べたいために金の欲しかった子規の病床日記にだって、収入のことをこう細かには書いていない。泡鳴は現実に徹していたので、金銭の事が絶えず心にかかっていたのであろう。彼れは金に関して決してだらし

のない人間ではなかった。

彼れは実によく書いた。それも、雑誌社の強請や生活費の必要から、大儀なのを我慢して書いたのでなくって、つねに意気込んで筆を執った。「実行即芸術」「芸術即実行」という信仰によって、勇士が戦場に向う態度で机に向った。……彼れはかつていったことがある。「朝目を醒まして新聞を読んで、愚論愚説に目を留めると、こいつをやっつけようと思って、寝床を出る」と。……私は、泡鳴の口から出た言葉を、今思い出して書いているのだが、私が書くと、彼れ独特の語調がどうも現れて来

ない。粗野な彼れの言語や文章にも、他の模し得ない力の響きがあったのだ。

とにかく、彼れはよく書いた。死後間もなく、予約出版の形で出た泡鳴全集十八巻が私の座側に並んでいる。しかも、彼れの一生の文章が悉く此処に集められているのではない。私の取り扱っていた読売新聞文芸附録に頻繁に掲げられた彼れの論文の多くは、この全集の目録を捜しても見当らない。……彼れはようやく世に重んぜられかけた時分に死んだのだが、もし今まで生存していたなら、どれほど多量に生産していたことであろう。老い

ても気力の衰えそうでなかった彼れは、「全集」として、五十巻にも百巻にも達するほどの製作を敢えてしたかも知れない。

日記のうちに、原稿を××社へ送ると書いてあっても、必ずしも××社から寄稿を依頼されたのではなかった。だから、××社から原稿返るという記事が多い。採用されないで突返されたことを意味している。しかし、そのために気を落すような彼れではなかった。編輯者に対して女性的の怨みを抱くような彼れでもなかった。「こいつやっつけよう」と思って、書いた抗議文を、未知の新

聞社長や名士に送って、相手にされなくってもしょげなかった。

日記によると、彼れの得た原稿料の高は甚だ軽少である。書きおろしの大論文集が、わずか五十円ばかりで取引されたりしている。これではいくら書きなぐっても貧乏する訳であって、さすがの彼れも、文学ではろくな生活は出来ないと、文学に見切りをつけて、樺太の蟹の罐詰業を企てる気になったのだ。これが成功していたなら、実業家岩野美衛（よしえ）で羽をのばして、「おからす芸者」や「北海道のすべた女郎」によって、辛うじて耽溺慾の満足を

試みないでも、美妓を蓄えた妾宅の二、三軒も持って、彼れの好きな豊太閤や伊藤博文を気取っていたかも知れなかった。……しかし、失敗したればこそ、『放浪』や『断橋』や『憑き物』のような名作が現れたのだ。

彼れが樺太へ出発する少し前に、私を東片町の陋宅(ろうたく)に訪問したことがあったが、その時、私の知人である株屋が座に居合せた。株屋は、泡鳴の計劃を聞き糺(ただ)した上、「それは止(よ)した方がいいね。そんな危いことをしないで、文学者は文学をやった方がいいじゃないか」と、真面目に忠告した。私も同感の意をあらわした。

二、三年後に、その株屋に会うと、

「いつか君とこで会った蟹の罐詰をやるといってた男はどうした？」と、彼れは訊ねた。

「無論失敗して、一文なしで帰って来た。」

「だから、おれがよくいって聞かせたのに」と、株屋は冷笑した。

しかし、今考えると、泡鳴の樺太行は、文学者として内容を充実させるための行為であったようなものだ。その樺太行の失敗は表面だけのことで、内面的には決してそうでなかった。夏目漱石は、書斎にあって、傑れた天

分をもって人間の心理の研究をして『心』や『行人』や『明暗』などの名作を出した。しかし、泡鳴が漱石のような生活を続けていたなら、粗雑な凡作しか世に出せなかったであろう。北海の風雪にぶたれながら、奮闘をつづけていたために、彼れの作品に自から深さが加ったのである。

四

泡鳴の評論には独り合点が多い。文章もまずいので読

みづらい。しかし、日本の文学者には珍しく、確固たる自己の哲学を持っているのに、私は好感を寄せている。浮世の風波に対して、この哲学が彼れに取っては、一枚の板子(いたご)ともなり、笠とも簑(みの)ともなっていた。彼れは日本主義を鼓吹し、極端な自我主義を主張していたので、今日流行の思潮とは相背いている。今なお生存していたなら、さぞかし多勢を相手に、死に物狂いの奮闘をするであろうと推察される。

彼れの論文では「刹那哲学の建設」というのが、最も要を得る。彼れの意見としての内容が充実している。チ

グハグなところが少ない。文旨もかなり明晰である。

「単純に究理のための究理は、単純に芸術のための芸術と同様、人生にあっても、なくてもいい専門である。」

「いわゆる人類根性の奥には、神とか、正義とか、博愛とか、平等とかいう、手段でなければ、空形式の俗習思想にからまれているものがある。……個人個人の関係において、弱者の独立存在は必要と思われない。従って、その不必要な弱者の独立を助けようとか、教えようとか、救済しようとかすることもまた不必要である。しかし、世間がとかく、その不必要なことに最もらしい理由を附

して、これを行いたがるのは俗習思想に拘束されているからである。社会主義、世界主義、正義、博愛、慈悲、犠牲等の馬鹿馬鹿しい観念はすべてそれから起っている。この諸観念の有害無害はさて置き、根底においてまことに浅薄なものではないか。宇宙はただ優強者が弱劣者を吸収して行くその足跡を印した名残りだ。優強者の存在が乃ち宇宙である。人類の存在もこの優強者の権利を維持して行くところにある。観じ来れば、優強者が弱劣者を吸収しつつおのれを発展したところに文明も出来、国家も出来た。」

これらは珍しい説ではないが、彼れはそれを日々の行動にも、文学の描写論の上にも及ぼした。彼れが自然主義者のうちでも、力のない客観説を排し、主観の燃焼を説き、描写にも一元描写を説いたのも、その結果であった。加藤弘之は、早くから「強者の権利」を主張していたが、当時の日本の通俗思想と妥協を試みることは忘れなかった。泡鳴は他の哲学者の物笑いを顧みないで、一本調子で徹底しようとした。ニーチェは超人を説いたが、泡鳴は、そういうものは外延的空想として排斥して、すべて、現実と自己とにおいて徹底しようとした。

「仏教のいわゆる小乗にせよ、大乗にせよ、僕らから見れば、五十歩百歩の相違だけであって、いずれもまだ真理を外的に追っていた。しかし、真理は自己以外に無い。自己の誠実な努力と経験との外に求めようは無い。」

「僕らは作品が永久にわたり生命があっても、なくっても、そんなことには頓着しない。その日その場その刹那において、人生全体の幻影が特殊の描写に現われなければならない。」

「物質的人生観を有するものらの作は、実質、すなわち、内容が空虚でなければ稀薄であるから、情けないこ

とには、まず周囲、運命などという空想的道具を持って来なければ埋め合せが出来ない。これは実に情けないことである。運命や周囲というものは出て来る人物の活動もしくは思想に先ず入っていなければ駄目だということを知らないのだ。」

優強者が弱劣者を吸収しつつおのれを発展させるのだという彼れの哲学、真理は自己以外に無いという彼れの人生観から出立して、彼れは、文学においても、刹那の描写においても人生全体の幻影の現れるのを志した。運命も環境も、出て来る人物の活動もしくは思想に入って

いることを期した。

彼れ自身の作品は、果してその哲学その文学説を具体化していたであろうか。

五

私は、今度、彼れの五部続きの長篇である『発展』『毒薬女』『放浪』『断橋』『憑き物』を、通読した。

小説の題目からして、泡嶋式に殺風景である。『毒薬女』なんて、意味を成さないいやな題である。全集には

こういう題をつけられているが、この小説はたしか、『毒薬を飲む女』として、中央公論に出ていたものであろう。全集編纂者が体裁上字数を縮めたためか、あるいは何かの都合で、勝手に改題したのであったなら、無責任である。（全体この泡鳴全集の編纂振りは、甚だ不忠実である。この浩瀚（こうかん）の書物に、総目録がついていない。著者の年譜もついていない。小説の解題も、どういう訳か、第一巻についているだけだ。）

それに、『毒薬を飲む女』という題目も、低級な感じのするいやな題である。薄々記憶するところによると、

作者は、例の無頓着から、作中の女主人公の名前か何かを一篇の題目としたのであったが、滝田樗蔭が、読者の注意を惹くために改題したのだそうだ。「××する女」とか「××する男」とかいう題目が、あの頃はちょっと流行した。

『発展』その他は、『耽溺』の後を受けた作者の自伝小説である。父親が病死して、息子の義雄が家を継いでからのことで、波瀾の多い数年間の事が義雄を中心として叙述されている。小説家が大きな意気込みをもって長篇小説に従事しようと思い立つのは、大抵作者の自伝を

書くことであるのが、自然主義勃興以来の日本文壇特有の慣例になっているので、泡鳴もその風潮に習った訳である。しかし、彼れの如きは、その主張からいっても、文壇の常套に従って、義雄その他の小説名を用いないで、すべて実名で通したらよさそうに思われる。彼れの排斥する遊戯分子が、そんなところにまだ名残りを留めている。

しかし、この五篇は、緊張している。貧乏と情慾に苛（さいな）まれながら奮闘している一箇の勇士の面目が躍動している。『毒薬を飲む女』は、中央公論に掲載されたため、

文壇の注意を惹き、小説家としての泡鳴の価値を重からしめたもので、そのために中央公論の彼れに払う原稿料が少しばかり値上げされたことは、日記を読むと推察されるが、しかし、五部作のうち、この一篇が特にいいのではない。五篇を通じて、彼れの通った世界が開展されているのだが、他の四篇は、東西の新聞などにきれぎれに出されたために、多くの注意を惹かなかった。

無批判な批評家は、島崎藤村でも岩野泡鳴でも、自然主義の作家として、一つの檻（おり）の中に入れてしまう癖があるが、この二人は作風が非常に違っている。田山花袋は

一面は藤村に似て、一面は泡鳴に似ている。

藤村氏はかつて、「いいたいことを何んでも露骨にいってしまう人間は思慮が浅い」というようなことを、何処かで書いていたが、泡鳴こそそういった人間で、「詰まらん坊」とも思われる所以で、含蓄を志している藤村氏と非常に異っているのである。しかし、『春』以来の藤村氏の幾つかの生活記録を通読して学ぶところの少なくなかった私は、氏とは性癖を異にし作風を異にしている泡鳴の五部作を通読しても学ぶところが少なくなかった。

私は、心熱を燃やして奮闘している泡鳴の五部作を、映画を見ているような態度で傍観した。作者が自慢しているような一種特別の人間を見ているような気持もするし、世間通有の人間を見ているような気持もした。悲惨な感じもしたし、滑稽な感じもした。餓えと色とに悩まされている汚らしい生物が、檻の中をのたうち廻っているのを見るような気もした。泡鳴の文章は粗野で、色彩なんかまるで欠けている。長篇を通じて、感傷的の文字は殆んどないといっていい。優美なところなんか薬にしたくも無い。小説好きの婦女子に好まれる気遣いは全く

ないのである。

しかし、私には面白かった。あの粗野な文章にも一種の力が籠っている。あの野蛮な会話に、他の作家の模し得られない力と、一種の調子を持っている。私は今度幾篇を読みつづけているうちに、泡鳴の小説の会話に、何ともいえない無技巧の妙味のあるのをはじめて感じた。漱石作中の会話が巧みであるとともに、作られたわざとらしさと、もどかしさを感じさせるのとは異っている。

古女房に愛想が尽き果てて、妥協の余地のない嫌悪の感じは、至るところ生地のままに出ていて、他の大抵の

作家の試みるような言い訳をしていないのが、私には面白い。子供に対してさえ殆んど愛情を寄せていないのが、日本現在の作家の作品のうちでは類例を絶している。子供の死去の通知に接しても、葬式の煩わしさを感じるばかりで、哀れなんか感じないところにも、私は特異の味いを感じた。

「人を呪えば穴二つだ――早くあの千代子（妻君）がくたばってくれりゃア」と願っていたのに、意外にも、千代子が死なないで赤ん坊が死んだ。義雄は、竜土会の

忘年会の幹事としてその夜出席しなければならないのだが、とにかく死児の処分もしなければならなかった。それで、妾宅（といっても、粗末な間借り住い）を飛び出して、病院へ駆けつけると、赤ん坊が死んでいる上に、他の子供もみんな病気で入院していた。妻君千代子は、目が落ち込んで、頬はずっとこけて、顔全体に血の色とても少しも見えず、変梃な陰陽学なんかに凝っていて、憂いと呪いのおも影のように、義雄の目には映じているのだが、こういう夫妻が、死児を前にしての感情の交錯や会話のやり取りは、凡作家の筆と違って、名優の舞台

を見るように、私には感ぜられる。（『毒薬女』中の数ページを見よ。）

「死んだものなんか、掃き溜めへほうり投げて置いてもいいくらいのものだ。」

「どうせあなたが死ぬ死ぬといってたから、あの子もその通り死んだのでしょうし、うちには誰れも人情にあつい人がいないのだから……まあ、とにかく、死んだ児の顔でも見納めに見ておいでなさいよ。」

「血の気のなくなった顔などア、手めえのを見ていりゃア充分だ。手めえマイナス気ちがいイクォル死だ。子

供は目をつぶって、口に締りがなく、土色をして固くなってるだろうが、そんなものも、もう何度も見飽きてらア。」

棺桶を送り出しといて、義雄は、芸者などのいる賑やかな竜土会の宴会へ出掛けるのだが、こういうところや、これに似寄った他の叙述を読むと、私はしばしば四谷怪談を見ている時と同じような感じがすることがある。義雄は民谷伊右衛門に扮して動いているようだ。彼れの目に映る千代子は、毒を飲まされたあとのお岩である。

南北の描いた舞台は、凄惨であるとともに茶番気もあ

るが、泡鳴の描いた小説の光景も、凄いうちに滑稽味が伴っている。民谷伊右衛門が極悪非道の結晶ではなくって、人間の弱さを有(も)っている如く、義雄も苦悶の哲理に徹しようと努めながら、まだ至らないところがあって、そこから滑稽味が流れ出るのである。

棺桶を病院から送り出したあと、千代子がすすり泣きして袖を目に当てているのに、義雄は顔を背けて、愁いの色を隠して、気を無理に持ち直して考えた。死に行くものは自分に関係がない。――亡父でも自分に残してくれたのは、ただ梅毒もしくは痔(じ)と僅かな財産だけだ――

千代子も死ね、お鳥(とり)も死ね、入院している二名の子も死ね、そうしたら、最も冷たい雪や氷の中へでも、自由自在に自分の事業をしに行けると。

「そうだ、どうしても、わが国の極北へ行かなければならない。――でないと、あいつ、意志が弱いのだ、するすると吹聴ばかりして、何も着手しないという、友人間のそしりを脱することが出来ない。」

この伊右衛門が、友人の思惑を顧慮するなんか、自から固持しているはずの「悲痛孤独の哲理」に徹していない証拠であるが、四谷怪談の伊右衛門にもそういう弱点

がある。しかし、そこが、非道人にも人間味が洩れているところだと、読者や見物の道徳性が満足するのかも知れない。

島崎藤村氏の『芽生』は、幼児の死を描いた小説であるが、それと、これと比べると、作者の態度も筆使いもいかに烈しくちがっているか。藤村氏のは人間恩愛の至情を写していて、読者の涙を誘うのである。父は子の死に対して、「我もまた、何時(いつ)までかあるべき……」とか、「芽生は枯れた、親木も一緒に枯れかかって来た」とか、溜息を吐(つ)いて感傷語を吐いたりしている。泡鳴の方では、

「もし生の悲痛に堪えるだけの活気がないとすれば、こいつ（他の病児）も今のうちに死んだ方がましだのに」と、病人の顔を見ながらいったり、これから、「自分のこれまでの失敗と不評判とを取返して自分の同時にまた全人的発展なるところの社会的発展をも実現することが出来るという希望が輝いた」と考えたりしている。藤村は至純至情の人間性に浸り、泡鳴は、「死んだものは掃き溜めへでもほうり込め」という傍若無人の意気で進んだ。

泡鳴はファウストなどを無内容な古典として軽蔑して

いるが、ファウストが、彼れのために罪を犯したマーガレットを牢獄に見舞ったあと、彼女の苦悩なんかはまるっきり忘れたように、百花咲き乱れる野に横わって、山を仰ぎ虹を見て人生を面白そうに夢見ているのは、泡鳴の化身である義雄が、悩める妻子を踏みつけて極北の事業を夢見ているのと、同様の心意気ではないだろうか。過去を抛って積極的に進む意気は似寄っている。ファウストが無内容であるはずがない。伊右衛門の心が泡鳴の心に内在していたのと、メフィストの心がゲーテの心に内在していたのと同様である。ただゲーテは優美華麗

な詞句を用い、泡鳴は蛮力で書き通したのがちがっているのである。

しかし、貧乏と蛮力とは、世に迎えられないので、『芽生』の人々は、医師や看護婦に好意をもって柔しく取り扱れているのに、泡鳴の小説中の人物は、ぞんざいに取り扱れている。その光景が、粗野な描写のうちに、自から浮んでいるのが面白い。そして、義雄自身は、そんなことに心を痛めたり、メソメソ社会の不平を洩らしたりなんかしていないのである。

貧乏や不遇によって気を落さないのは、泡鳴の小説を

貫いている一特色であるが、そこが、一方からいうと、小説読者の心を魅惑しない理由になっている。貧乏や死別などの人間苦をうつしても、泣き顔を見せて読者の同情心に訴える方が喜ばれるのである。

義雄が終始一貫して、いかなる場合にも、千代子をお岩あつかいして、寸毫（すんごう）の譲歩をもしないのも、他の作家の作品と異なるところである。そして、千代子は作者から正当な取り扱いを受けていないのであるが、有楽座の音楽会へ義雄とその妾のお鳥とが出掛けているのを察して、自分もそこへ行って、二人を悩ますところから、二

人の間借住いを襲うあたりは、嫉妬に狂った女の動作や心理がおのずからよく描かれている。「困りますから、早く帰って下さい。子供がいうことを聴きません。どうか、お願いですから帰って下さい。ほんとに、おねが──」と、往来の、乞食のこもの側から、窓を見上げて叫ぶあたりは、読者に哀れをさえ伝えている。女の嫉妬と、義雄がお鳥と他の男との関係についての嫉妬など、醜く、汚らしく、しかし、生々しい実際を現しているのは、『心』や『行人』に深く追窮されている嫉妬の心理描写が、上品であり芸術的で、現実味を欠いているのと

違っている。……芸術というものは、絵画でも小説でもいかなる醜い題材を描いても、それに接する鑑賞家に、不快な感じを起させるようではいけないので、泡鳴のを読んで行くと、彼れに芸術的天分に何か欠けたところのあることが察せられる。それに、粗野で無愛想なお鳥のモデルであった女は、かつて著者に連れられて、例の「メリンス無地の牡丹色の被布」を着て、一度私の家へ訪問したことがあったので、読みながら、そのいやな姿が目について私の興を醒ますのである。

泡鳴は身を以て小説をつくっていたので、そこに真実

の強みがあったのだが、自己に直接に関係のない材料を取り扱ったものは、どれも大抵は、蕪雑で独り合点で拙劣だ。戯曲のような客観的才能を要するものに、傑作のないのは当然である。

彼れは、大津事件の津田三蔵を題材として、一篇の小説を書いた。かつて伊藤公を小説に書こうといっていたから、「そんなものが君の腕で書きこなせるだろうか」と、私がいうと、「そりゃ書けるさ」と、例の自信を現して、熱海の樋口で聞いたことがあって、それによって、伊藤の内面生活に喰い入るというような抱負を述べてい

た。剛情な自信家であった彼れも、一面非常な軽信家であった。オキシヘラーとかが健康にいいといって、頻(しき)りにその提灯持(ちょうちんも)ちをして、私に勧めたこともあったが、その価値について根拠ある知識があるのではなかった。彼れはかつて、旅先から読売新聞に、彫金術に関する長ったらしい論文を寄せたことがあったが、それは変なものだった。それを読んだ専門家は嘲笑していた。あとで泡鳴に訊くと、彼れは、温泉場で知り合いになったある彫刻家（それは、名も知れていない男）から意見を聞かされて、そ

れを唯一の根拠として堂々たる論文を書いたのであった。日常の座談にも、人の一言を盲信していきり立つことがあった。……樺太の事業に失敗したのは当然であった。

六

樺太で雑作なく失敗して、すごすご北海道へ戻って来た彼れは、「思い返えせば、彼れは人を信じ過ぎていた」と、ようやく目が醒めたように反省している。

『放浪』『断橋』『憑き物』は、一文無しで孤影悄然と

して北海道をうろつきながら、まだ一分の未練を事業に対して残していた間の経験記録で、泡鳴一代の傑作である。私は、以前きれぎれに読んでいたのを、今度はじめて通読して、予想外の興味を覚えた。芸術として欠点だらけであるにしろ、人を動かす力は、明治文学中の何人(なんぴと)にも劣らないのである。

東京の雑誌二、三冊と手帖と、不断着の袷(あわせ)と袷羽織とメリヤスのシャツとを入れた風呂敷包一つを総財産として抱えて、札幌へ戻って来た田村義雄は、宿を取る費

用を持っていなかったので、ある友人――友人といっても、十年も会わなかった昔の同窓で、樺太渡航前にちょっと立ち寄っただけの間柄――の家のガラス戸を開けて、「帰って来ましたよ」と、無雑作に入って行ったところから、小説ははじまっている。

その家は、薄給の教師の家だから、寄食される方も迷惑だし、寄食する方も心苦しい訳である。東京のさほどでもない文学者が田舎へ行くと、事々しく歓迎されるのが、常例であるが、義雄は無一文の淋しさを心の中に潜めながら、賑やかな歓迎を受けた。これで直ぐ帰京した

なら、一ぱしの名士として記憶を後に残して、襤褸(ぼろ)を見せなかったのだが、失敗したまま、何もいい当てのない東京へ帰るのが無念さに、この北地で何かし出かそうと考えながら愚図愚図していた。

当て事は次から次へ外れて行く。敬遠されたり冷遇されたり愚弄されたりしながら、弱さを見せまいとする彼れの奮闘は、私には、有るがままに見た人間生存の真相みたいに思われる。

「世界に向って大貿易を開くのも、一国をまとめてその手中に操縦するのも、自己一身に立籠って本能の無飾

的な発展を全くするのも、事業並びに実行としては、決してその大小と高下とはない」といいながら、さすがの彼れも、現在の見窄(みすぼ)らしい放浪生活に堪えられなくて、「しかし、思うままに、外面的な実行にも、もっと自己を発展して見たい」と興奮している。

後藤男爵や、法相何某や、伊藤公爵などが渡来して、全道の人気を湧き立たせている間に、内面的英雄たる彼れは、路傍の乞丐児(こじき)の如く人に顧みられなかった。せめてこの機会に、北海道の巡遊だけでも試みたいと志しながら、乗車券と些少の旅費とを新聞社から得るために、

いろいろな屈辱を経なければならなかった。彼れがようやく巡遊の途に上って、馬なんかに乗って奥深く進むところは、痩馬に跨(またが)りながら、騎士気取りで魑魅魍魎(ちみもうりょう)の退治に向っているドンキホテの後ろ姿が連想される。

彼れは、札幌において中学校の演説会に招かれたが、その頃、ハルピンにおける伊藤公の凶変が伝わっていたので、彼れは演壇に立つと、まず伊藤公の略歴から説きはじめた。しかし公について語るのは自分自身を語ることであった。熱心が加って来るに従い、われを忘れるほどの大声をつづけざまに発し、それが講堂中を振動させ

た。主会者が気遣って、「あまり大きな声を出すのは身体に悪いよ」と注意したほどであったが、滔々(とうとう)二時間つづきで自己の哲学を弁じ立て、「おれは宇宙の帝王だ。否、宇宙その物だ」などと叫んだ。講堂はどっと笑った。義雄は大いに怒って、人々の謝って止めるのも聞かず、鳥打帽子を忘れたまま駆け出した。

そのため、彼れは周囲の知人から、発狂したとの噂を立てられた。ある知人は、彼れの精神状態を検査するために、いろいろな質問を呈したりした。知人と彼れとの間の問答のあたりは実に面白い。セルヴンテス作中の主

人公の宗教的問題や気燄(きえん)が思い出される。小説読者よ、ここを読んで笑う勿(なか)れ。笑うのはいいが決して冷笑することと勿れ。愚弄翻弄のうちに辛うじて食を得て、志すことのすべてが鵤(いすか)の嘴(はし)と喰いちがってばかりいる主人公が、毅然として自己の所信を守って、愚痴をいわず卑屈な態度を見せなかった幾ケ月間の放浪の旅における生活振りを顧みよ。哂(わら)うにはあまりにいたましき人の世なのである。

知人が冷語を残して去ったあと暫(しば)らくして、つかつかと入って来る足音がして、「わっ」と彼れの枕もとに泣

き伏したものがあった。それは、例のお鳥であった。
「どうしたんだ。」彼れがびっくりして首を上げると、
「き、気違いになったというじゃないか」と、すすり泣きだ。
「馬鹿！　だ、だれがそんなことをいった？」
ところで、この二人の男女は、互いに深く相愛し合っているのではなかった。
義雄は、この放浪の旅において柔しい愛に饑(う)えていた。物足らない淋しい心を異性によって慰められたかった。たまたま手に入った零細な原稿料などを袂(たもと)に入れて、

あるいは知人のお伴になって、土地の遊女屋の客になって、時には馴染みの女の手管にやすやすと乗っていい気になっていたこともあったが、それだけでは、満足出来なかった。ところが、他人の家や安下宿屋の薄い冷たい夜具の中で、女欲しい思いを凝らしていると、彼れに多少でも愛憎の拘(こだわ)りを見せてくれる女は、天上天下、例のお鳥一人であった。東京にいるお鳥の影だけが、彼れの空想に徂徠(そらい)していた。で、その女を知人に対してのろけの種にしたり、その女に嫉妬を籠めた手紙や現状の報告書を送ったりしていたが、ついにお鳥を呼び寄せる手

筈がついた。

「あの皮膚の美しさ、やわらかさ。敷島（遊女）などのとても及ぶところでない」と頻りに空想を逞しゅうして悦しがっていたが、しかし、彼女は、彼れの悪疾をうつされて不具同様になっていて、しばしば、「元の身体にしてかえせ」と、彼れに迫っていた女であった。「青年時代のような恋愛神聖論者でも、内容の空しいのを知らないような理想家でもなくなって、霊肉合致の恋を欲する」彼れに満足を与えるような女ではなかった。

でも、彼れは、そういう女をでも呼び寄せて傍に置こ

うとした。彼女の方でも、病身のために自活の道がなくなって、彼れをでも手頼らなければ、どうしようもなかったので、遥々北海道までやって来たのだ。

義雄の寄食している他人の家で、他人夫婦の目の前で二人は一別以来の顔を見合せたのだが、その最初の会話はこうだ。

「早く病気を直せ。病気さえ直れば、もうお前の世話などにならん。」

「まだ直らないのか。」

「ふん。……医者にも行けなければ、直るはずはない。

あんなに何度も手紙でいうてやるのに、……手紙の意味が分らん人でもなかろう。」

「そりゃ、少なくとも、お前よりは読めるよ。」

「読めるなら、なぜその通り療治代を送ってくれん？」

「送るにも、金がなかったのだ。」

彼れが知人にのろけたり、淋しい世の唯一の伴侶として心待ちにしていた女は、会って見ればこうであった。傍で見ていたその家の夫婦は可笑しさやら気の毒さやらで、「そう喧嘩にばかりなっては御相談も出来ますまいから、仲直りをなさったらどうです？」と取り做(な)さなけ

ればならなかった。

「いくらおとなしく話そうたって、あの苦虫を噛みつぶしたような顔をされていては」と、男はいう。

「苦虫でも何でも、病気を直してくれたらよろしい。病院へ入れてもらう。入院さしてもらう」と女は叫ぶ。

そうこうしているうち、義雄は無理工面をして女を入院さすことにした。しかし、その入院はみじめなものだった。東京の女として周囲の人達にほこりたいと、女らしい虚栄心を有っていた彼女は、かえって日に日に屈辱を忍ばなければならなかった。遥々訪ねて来た甲斐がな

かった。それで、毎日沈み切った顔していて、義雄に会うと、きっと、泣くか怒るかするより外なかった。

ところが、天長節の日、雪晴れの午後、彼女は珍しくニコニコした顔つきして、病院から義雄の下宿を訪ねて来た。

「天長節が嬉しいのか。」

「そんなことでもない。別に嬉しいことがあるのさ。」

彼女の廂髪（ひさしがみ）の前髪に蒔絵のゴム櫛がささっていた。「林檎（りんご）を送ってやるからというて、東京の友達から送ってもろうたのじゃ……ゆうべ届いた。」

彼女の機嫌のいいのは、うるさくないだけでもいいと義雄は喜んだが、この二人の男女が睦(むつ)まじく話し合ったのは、この時だけであった。数巻を通じて出没している彼女に対して、読者がその心根をいじらしく感じて親しみを覚えるのはこの所だけであるといっていい。……ところが、それも暗黒の雲間からちらと洩れた一すじの光に過ぎなかった。

二人は仲のいい折をはずさないで、市中の散歩に出掛けたのだが、結果は幻滅に終った。途中で彼女の身体が痛んだので、知人の家へ寄って、義雄は持前の気焔を吐

いて時の経つのを忘れていたのだが、「葡萄(ぶどう)色の唐縮緬(とうちりめん)羽織」のお鳥は、その家の妻君の「小豆縮緬の羽織に黄八丈(きはちじょう)の小袖」を着ているのに目を注がないではいられなかった。自慢のゴム櫛なんかを喜んでいる自分がみじめになった。

日暮れ頃に知人の家を出て帰途に就くと、間もなく、お鳥は突然「うそつき。畜生」と叫んで、義雄を乱暴にも突き飛ばした。それから一しょに彼れの下宿に帰ることは帰ったが、二人の間の暗闘はつづいた。

「病院へ帰るなら早く帰れ」と彼れがいうと、

「帰ってる留守に、今夜、逃げてしまうんだろう」と、彼女がいう。

彼女は病気のまま、知らぬ他郷に打っちゃられるという恐れを抱いている。彼れは、知人らが彼れの帰京費を醵金(きょきん)して帰らせようと噂していることを聞かされて、「北海道の新聞記者の成れの果て」のようなみじめさを自覚したりしている場合であった。貧しいながらもこればかりは手放さなかった記念の銀時計さえ、人に騙されて持ち逃げされていた。

互いにおのれの思いに耽って黙していたが、ふと、女

は、「あ、あッ」と叫んで突立ち上った。肉体の痛みを感じたのである。

「どうした？」彼れもはね起きた。

「死の！　一しょに死の！」

彼女の顔と声とに惹かれて、彼れも咄嗟（とっさ）に死ぬ気になった。

二人は、死支度をして出て死場所を捜した。ここが、五部作を通じてのどん詰まりであって、人の世の悲惨なる滑稽がひしひしと私の胸に迫るのである。二人はちっとも愛し合ってはいないのだ。近松の常套的道行とは如

何にちがっていることか。二人とも黙々と歩いている。義雄は、妻のことはいうまでもなく、子供のことだって些(すこ)しも思い浮べていない。ただ昔の恋人と吾妻橋の上で生き別れをしたことなんか思い出している。いよいよ死に臨んだ間際に自分の胸の煮えくり返るように、お鳥に対して憎悪を感じたりしている。二人は互いに他を憎みながら一しょに死のうとするのである。

でも、二人は抱き合って、薄暗のなかを、鉄橋から飛び下りた。しかし、彼らは、冬中の寝雪(ねゆき)として川床に積み重った雪の上に落ちたのであった。彼らの決心はそれ

で消えてしまった。川床から札幌へ出るには、細い小川を渡らなければならないので、彼れは女を脊負って、編み上げの靴のまま流れをざぶざぶ渡った。四十歳近い男と二十二、三の女だから、お半を肩に長右衛門である。雪は降りだして次第にひどくなった。

川を出て気がつくと、彼女は、大切なゴム櫛を鉄橋を飛び下りる時に落していた。

「身代りになったのだろうさ。また買えばいい。」

「金がないのに、買えやせんじゃないか。」

「そんなことはないだろう。」

「買えやせん買えやせん。探して来い。」
「馬鹿をいうな。」
型の如き心中ではないので、人の世の悲惨なる滑稽がひしひしと私の胸に迫るのである。もし彼らが目的を遂げていたならば、彼らの死について、型の如き想像がめぐらされていたのであろう。

私は、泡鳴のこれらの小説を、他の明治の傑作に比べて見た。鷗外の『澀江抽斎』『伊沢蘭軒』などには、人間の悲喜哀歓の心理について揣摩臆測を逞しゅうしない

で、ある時代と、そこに生存していた一個人の外観の行動を叙しているだけでかえって、ある人間の真面目が浮び出ているように思われた。漱石の『心』などは、ある心理の追窮を尽したものである。この二作家は、明治の作家中の最も学究的の作家であったが、一生かかって磨き上げた彼らの心に、晩年において映った人生は、如上の作品において現れている。その目とその心とその筆とが渾然として、芸術家としての彼らの特色を現している。また有島武郎の『或る女』は、女性の強さ弱さ美しさ醜さを、微細に豊かなる文章によって現している。これら

に比べると、泡鳴のは著しく粗野である。一見非芸術至極である。しかし、その非芸術らしいところに、彼れ独特の生き生きした心熱主義の芸術があるのである。

七

「自分は蛇を好む。蛇の直立したのが人間だ」と、泡鳴は何処かで書いている。しかし、彼れのいうところの蛇は、シェレーが好んで用いたような荘厳美を現すためのそれではなかった。それで、五部作を通じて現れてい

る彼れは、直立している蛇の凄さと滑稽さを帯びているが、『憑き物』以後の彼れの自伝小説は、よっぽどふやけている。ぬらりくらりと匐(は)っている蛇で、直立しているような緊張味が乏しい。前者のいいのは樺太北海道の惨苦が彼れを鍛えたためであろう。

在来の傑れた文学に比べると、彼れの小説はいかにも無作法である。人間に具っている芸術慾は、こういう者では満足し切れないので、多くの読者は泡鳴の作品には面を背けるであろう。ある読者は興味をもって読んでも、いわゆる「詰まらん坊」の行為の記録としての興味であ

ろう。しかし、虚飾を剥いで見たら、この「詰まらん坊」の小説に、自己や周囲の人々の真相について思い当るところが少なくないだろうと思われる。少し馴染んだ札幌の遊廓の女が、「あなたほど正直な人はない」と感心している。泡鳴は、才気は乏しかったが、物事を誤魔化そうとしなかった。頭脳は不聡明であったが、読者に媚びようとはしなかった。おれはこうだと臆面もなく自己を出している。後人にどう思われようとも、彼れは作家としては悔いるところのない生涯を過した訳だ。「首が飛んでも動いて見せるわ」といった伊右衛門の意気は泡鳴

にも見られた。

北海道から帰って来て私を訪ねて来た時には、彼れの「痩せ方や顔容の蒼白かったのは、殆んど人間らしくなかった」と、中沢臨川のいっている通りであったが、私との交際が疎遠になった後年の彼れは、顔がつやつやしくなって元気がよかった。次第に世に認められるようになって、生活もいくらか豊かになったらしかったが、それが次第に彼れの作品を鈍昧にしたのではないだろうか。有名な『征服被征服』なんか、独り合点の、いい気な小説である。

泡鳴の新体詩をところどころ読んだ。殆んどはじめて、彼れの詩に接したといっていいのである。史詩『豊太閤』は、彼れの崇拝していた英雄を唄っているに関らず、通俗な豊公感を述べたに過ぎない。旧套的七五調がそこでは八七調となっているにしろ、それを単調につづけて行くのが、昔流行していた新体詩の調子を思い出させる。私は、こういう新体詩がきらいであった。それで、詩の悪口を新聞によく書いていたので、泡鳴が最初私を突然社に訪ねて来た時にも、私の無理解な罵倒について不平を述べていた。

しかし、今度の『恋のしやりかうべ』と題した詩集に収められた小詩を読むと、どれも面白い。小説では蕪雑さ汚らしさ無器用さが目立つが、これらの詩にはそういうものがなくって、従って反感なしに私の心に入って来る。言葉と感じとが一つになって響いて来る。現実の生活苦を通って来た人の詩である。「死外七編」なんか、ことに愛誦に価いしている。泡鳴は本来、小説や戯曲の作家としてよりも詩人としての天分を豊かに有っていたのではあるまいか。小説『発展』のはじめの方に書かれている父親の死亡前後における作者の気持は、かえって

これらの詩に、余計なまぜ物なしに、よく現れている。作者の気持と周囲とが渾然とした象徴になっていて、わざとある物を対立させたような、作られた象徴詩ではない。『胸のきしめき』『火葬』『庭木の刈り込み』などからは、在来の漢詩和歌俳句などから受ける感じとはちがった、もっと自分の心に密接した詩の感じを、私は受けた。……私は、現代の詩人の作品を殆んど読んでいないから、泡鳴が、他と比較して、どういう位地にいるか知らないが、今、彼れの幾篇かの詩を読んで、文学者岩野泡鳴の真価を新たに見直そうとしているのである。

日本主義を力説し、個人主義を主張していた泡鳴には、今日勢いを得ている思想から見ると、時世おくれの古さがあるのだが、よくも悪くも、彼れは人真似をしない独自のものを一貫して持っている。時代を隔てて読んでも、いきいきした印象の与えられる所以である。

いろいろな問題に関する彼れの感想録についても、彼れの私生涯についても、書きたいことがいろいろ浮んで来たが、あまり長くなるから、このくらいで筆を擱(お)くことにする。（六月二十日）

日本文学電子図書館

作家論

著　者：正宗白鳥
制作者：宮澤一郎
出版社：岩波文庫、岩波書店
2002年６月14日 第１刷

日本文学電子図書館